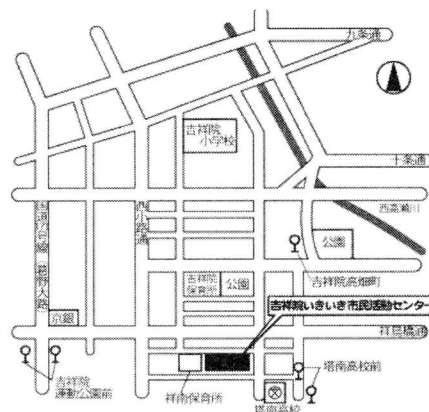


吉祥院六斎歴史資料展示室



■ 吉祥院六斎歴史資料展示室の課題／常設的な啓発として資料室の役割が重要です。資料室をさらに活用するためには、常設展示だけで基本的な人権教育が理解できるよう、展示面の充実を図る必要があります。

特に、吉祥院六斎に関する文化資料が多く収集されており、専門スタッフの配置によって、資料室本来のあり方を目指し、また、資料室が人権の輪を広げてい拠点となるよう定期的に資料室を支える人の輪を作る活動を進めます。幾度も廃絶の危機を乗り越えて、地域の人々の手によって、今日まで受け継いできた素晴らしい伝統芸能を人権文化の拠点として、六斎の歴史的意義を地元で紹介する中で、様々な活動を支援する、地域交流にふさわしい場となるよう願っています。

2011年4月1日、京都市南区・京都市吉祥院いいきき市民活動センター別館3階に「吉祥院六斎歴史資料展示室」が新たにオープンしました。吉祥院六斎の後継者育成や歴史資料の展示など、六斎の歴史的意義を地元伝える目的で設置されました。

将来的には、吉祥院六斎念仏踊りだけでなく、京都市内で活動する六斎保存活動の支援も行っていく他、人権文化と六斎の歴史的意義の発信拠点として、地域の活性化とまちづくり・人づくりにつなげる施設になることを目指しています。

資料室のオープンとともに、研究会や子ども六斎会の活動が地域に伝わり、NPO法人ふれあい吉祥院ネットワーク等のバックアップもあり、地域全体が六斎保存活動に協力するきざ兆しが少し見えてきました。

京都市内で継承されている六斎念仏の中でも吉祥院六斎は、他にはない歴史によって伝承されています。それは、差別との闘いの中から生まれ、差別とともに生きてきた差別の歴史が隠されています。舞台上上がることを阻止され、差別は、子どもたちの誇りまでもうば奪おうとしました。差別に立ち向かうことが、多くの六斎念仏が廃れていく中でも、伝承を継承する力に変えて行ったのです。

資料室では、誰もが気楽に来館でき地域の伝統文化財に触れていただきたいと願っています。



● 吉祥院六斎歴史資料展示室
〒601-5858 京都市南区吉祥院砂ノ町47番地
開所日：毎週火曜日及び年末年始を除く毎日
開所時間：午前10時～午後9時
☎ (075) - 691 - 7561
吉祥院いいきき市民活動センター
吉祥院六斎歴史資料展示室

人権・歴史フィールドワークに活用

吉祥院六斎歴史資料展示室は、フィールドワーク学習の場として、差別に関わる問題を深め、六斎と関連し、人権・歴史を学ぶ目的で設置されました。

NPO法人ふれあい吉祥院ネットワークは、互いが結び合い、地域の歴史性や社会性を共有する中で、地域文化を基盤とした人権と共生を学び、人権教育を支援することは、発足当初からの懸案であり、それを面的に継承・発展させることは当然の実践課題でした。

地域の伝統芸能として、伝承されている吉祥院六斎を通して、地域、学校、企業で差別をテーマに人権問題をどう組み立てるのかという課題意識を確認できる場になることを期待しています。

1980年代の解放運動や同和教育の取り組みの中で、差別に生きる子どもたちの実態を学び、生きた学力、生きた教材、生きた教育が必然的に生まれ、1990年代には、同和教育の実践が国際的な人権教育の潮流とリンクし、さらに、多文化共生教育等の中で生まれた学習方法をはじめ、新たな実践手法を取り入れ、学び取りながら、豊かな彩りを放ちはじめました。共に学びあうという双方向の教育の発想や手法が解放運動や同和教育の現場の切実なテーマとして実践者に受け入れられました。

この過程の中で、それまで学校や地域で取り組まれていたフィールドワークが互いに結び合い、教育実践としての歴史性や社会性を得ることにつながり、人権のまちづくりや自らのアイデンティティの確立を求めて、教育・就労・生活の確保に向け、市内各地域で推進されはじめ、各団体が地域や学校を学びの場とする子どもたちを地域社会を構成するかけがえのない人材の育成につながった時期でもありました。



地域の施設を学びの場とした人権・歴史フィールドワーク学習は、このような同和教育の実践が創造してきた地域と学校の連携や実践、教育の創造実践の中で、人権学習の一領域としての位置を担うことができました。しかし、いま地域や学校において、同和教育として、積極的に取り入れにくく、今日では学校教育にのみならず地域教育の場においても、積極的に取り組めなくなっています。



京都市交通局人権フィールドワーク学習

そのため資料展示室では、吉祥院に伝わる六斎の歴史的意義をと通して、文化・人権・共生のテーマを探り、差別につながる事実や課題の掘り起こしを目指として、人権・歴史フィールドワーク学習に取り入れ、学校や企業に積極的に活用してもらえるよう働き掛けています。

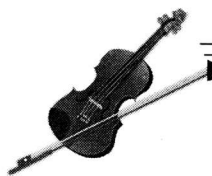
京都市交通局では、職場研修の組織的、効果的な推進を図り、安全運行の推進お客様接遇の向上、人権文化の構築、公務員倫理の確立等の効果を高めるため、職場研修推進専門委員会が設置され、今回、人権・歴史フィールドワーク自習研修として、吉祥院六斎歴史資料展示室を見学し、吉祥院六斎念仏踊りを通じ、地域の伝統文化の継承と人権について学習されています。

吉祥院六斎念仏踊り

*It has been designated an Important Intangible Folk Cultural Property.
Kisseyoin Rokusai Nenbutsu Odori. designated in 1983.*

大阪音楽大学付属図書館(大栗文庫所蔵)に

吉祥院六斎念仏踊りの貴重な資料が見つかる



2010年7月9日、大阪音楽大学非常勤講師白石知雄氏から(石田房一獅子の如く代表に)電話が入りました。大阪音楽大学付属図書館大栗文庫に吉祥院六斎念仏踊りの録音テープが見つかるという内容で、早々、録音テープを確認するため、白石知雄氏とお会いし、お話を伺いました。

大阪出身の作曲家、大栗裕(1918-1982)日本のクラシック音楽の作曲家の遺品が「大栗文庫」として大阪音大が管理・運用されており、大栗裕氏の遺品のオープンリーンテープ約100点の中の一箱の外箱に「吉祥院六斎念仏」と記載されていました。

この作品は、1961年(昭和36)に朝日放送のプロデューサーから京都に残る六斎念仏を主題として、何かオーケストラ曲を書かないかと依頼され、第16回文部省芸術音楽部門参加作品として、大栗裕氏が管弦楽曲『雲水讃』を作曲されたもので、2つの小品からなっています。

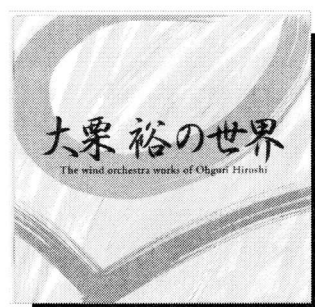
曲は、六斎念仏の素材を取り入れ、諸国を行脚し、求道に励む雲水の姿をあらわそうとしたものです。六斎念仏という京都特有の郷土芸能で、今から約1000年前に、空也上人が、民衆教化のため京洛の街頭に立って、鉦や太鼓を打ちならし、身振り、節面白く読経念仏を唱えて廻ったことから始まったと伝えられ、京都の地域で保存されている貴重な文化財の中でも、代表的な六斎とされている吉祥院六斎を取材し、作曲したのではないかと思います。

大栗裕氏の『雲水讃』のテープには、吉祥院六斎保存曲目から、^{ほつがん}発願、つつて、お月さん、四ツ太鼓、安達ヶ原、祇園囃子、獅子と土蜘蛛などが録音されていました。

1962年1月12日、大阪フィルハーモニー交響楽団第15回定期演奏会でも紹介された、この貴重な録音テープ(複製CD-R)を吉祥院六斎歴史資料展示室に寄贈していただき、保管展示させていただきました。

貴重な六斎念仏オープンリーンテープを提供いただいた白石知雄先生と大阪音楽大学付属図書館大栗文庫の担当の方々に心からの感謝を申し上げます。





組曲「雲水讃」

(1961年／吹奏楽編曲 木村吉宏2005)

原曲は、1961年、大阪の朝日放送・伊藤厚プロデューサーから六斎念仏を主題として何かオーケストラ曲を描かないかと提案されたことが切っ掛けで、朝日放送第16回文部省芸術祭音楽部門参加作品として作曲された管弦楽組曲で、原題は『交響管弦楽のための組曲「雲水讃」』。芸術祭参加は、ラジオ放送という形式で行われ、森正指揮、大阪フィルハーモニー交響楽団が収録、同年11月27日午前0時30分からの番組でオンエアされました。

発表当時は、3曲構成の組曲でしたが、作曲翌年の1962年1月12日に大阪・毎日ホールで催された同フィル第15回定期演奏会における朝比奈隆指揮の演奏につづき、渡欧する朝比奈氏の指揮により、ハンブルグ北ドイツ放送管弦楽団、ドレスデン・フィルハーモニー管弦楽団、ライブツィヒ放送管弦楽団、ローマ・サンタチュチーリア音楽院管弦楽団の各コンサートでも演奏されることになったことから、定期演奏会までに構成上の大きな改訂が加えられて2曲構成の作品となりました。

これが決定稿で、このディスクには、今回の特別なライブのために大阪音楽大学附属図書館・大栗文庫に保管されている管弦楽スコアから起こされた木村吉宏氏の吹奏楽編曲が収録されています。作曲者が少年時代に訪れた高野山の林間学舎で感じた静寂、あるいは父と登った妙見山で音吐朗々と御詠歌を唱えた遠い記憶などを背景に、京都に伝承される六斎念仏に音楽的素材を求め、諸国を行脚して求道にはげむ雲水（禅宗の修行僧）の姿をあらわそうとした作品で、素材は京都、吉祥院天満宮、西賀茂、西方寺を取材されました。

六斎念仏は、経典にある月6回の齋日に念

仏を唱えたことにその名の由来があり、作曲者が取材に赴いた2ヶ所の内、五山の送り火の8月16日に行われる西方寺六斎念仏は、白い装束の太鼓方と黒い羽織姿の鉦方だけで演じられる古風で素朴な千菜寺系の念仏六斎として、4月25日春期大祭、8月25日夏期大祭に奉納される吉祥院六斎念仏は、境内の舞楽殿で笛、鉦、太鼓を使い、長唄や謡曲の芸能的要素を取り込みながらおかめやひよっこ、獅子と土蜘蛛が登場して賑々しく演じられる娯楽性の高い空也堂系の芸能六斎の中心的存在のひとつとして知られています。

作品は、素材こそ得たものの六斎念仏それ自体を中心的テーマとして捉えたものではなく、前述のように、行雲流水（こううんりゅうすい：空を雲が行き、川を水が流れる如く自由闊達）とも例えられる行脚する雲水の姿をあらわしており、「第1曲」はレント、静寂の中から修行僧の声明（しょうみょう：読経と鳴らし物による仏教音楽）があらわれ、曲の中央部に向かって大きくうたい上げられた後、やがて遠ざかっていくというスタイルで書かれています。

前曲からのアタックで始まる「第2曲」はアレグロ・モルト、宗教的な儀礼や祭礼のように響く前半部分とお祭り気分にも似た高揚したムードにまで発展する後半部分からなる主部、それに続く展開、再現部を経て終結部へと至る構成をとり、対照的な2つの六斎念仏から採られた素材が器楽曲として自由に展開されています。

（註：この作品の「声明」の部分で聴かれている旋律は、真言宗御詠歌にほぼ同じ旋律が存在し、そこから採られたとも考えられるが、信徒が詠う「御詠歌」との説明は、禅宗修行僧である雲水の姿をあらわそうとした作曲意図にまっくなくならないことから、ここでは、声明と説明されています。六斎念仏と同様、素材としての活用にとどめられたと考えられます。また、管弦楽原曲から吹奏楽へは前曲が編曲されたが、このライブでは、原曲「第2曲」主部前半部に存在する管弦器では著しく表現困難な箇所のカットが行われています。） 「大栗裕の世界」より